

松波むかし語り ここに生き続けて **その 18**

今回のお客様

「国泉屋酒店」を営んでいた

さいが 齋賀 ちかしさ 親 さん 78歳 4丁目

“フィットネスクラブへ行かなくとも、酒屋が重労働だったおかげでしょうが、元気です!”

—30年間、ラジオ体操を日課とし健康に留意する齋賀さんは、地域の防犯パトロールにも毎回、参加されるそうです。



先月の北島英明さんに続いて、今月も元気な 78 歳をご紹介します。齋賀さんは市原の五井生まれ、「西千葉駅の近くに出物がある」と言われたお父さんの言にしたがって昭和 29 年、松波 4 丁目のバス通りに面した現在地に越してきました。「市内循環バスの走る作草部から西千葉駅にかけての大通りは、舗装されてましたが歩道はまだ土でしたね」。お店を始めたのは昭和 32 年 8 月とか? 「町内には川幡さん、穴倉さん、小関さん、それに今も続く越後屋さんなど、酒屋は多かったです。当時、店では量り売りをしていて、酒や焼酎はもちろん、酢や砂糖も量って売った経験があります」。「国泉屋」の屋号はどちらから? 「実家が代々、造り酒屋をしてまして、その酒の名前が『国泉』なんです」。

当時は一升瓶の日本酒が主流でしたか? 「そうですね、酒・焼酎が 8 割、ビールが 2 割ほどでしたか。それが昭和 40 年代になるとビールが逆転しました」。ビンの配達は大変だったでしょう? 「お客さんは、重いのと、割れると困るからでしょう、配達が多かったです。昭和 29 年にバイクの免許をとってまして、検見川から今井町まで配達しました」。場所柄、松波と轟の両方にお客が広がっている関係から、当時はどちらの町内会からも祭りの寄付の依頼がやってきましたとか。



昭和 52 年頃 “うまい生ビール”
が続々発売された頃の国泉酒店

酒屋さんという商売は重労働ですね。「当時の一升瓶は木枠に 10 本入ってましたし、24 本入りのビールは 27 キロもありました。その後 20 本入りケースができて、それを東大宿舎の 5 階まで届けると、ドアが開いても、息が切れてすぐ返事ができないくらいでした。それでも大晦日には朝 8 時から回り始めて、夜 11 時までには 204 軒配達したのを覚えています。もっとも、2 回ほど腰を痛めてハリで治しましたが……」。「重労働のおかげで酒屋は長生き」と語る齋賀さん、「フィットネスクラブに通わなくとも元気でいられます」と。でも今でも朝は必ず早く

起き、ラジオ体操を 30 年続け、ウォーキングに励むなど健康には気を使っています。

齋賀さんは野平会長から吉田会長の時代まで町会役員を務めてきました。防犯防災部が長かったからでしょうか、今でも毎月 2 回の夜の防犯パトロールと年末年始の夜警には齋賀さんの元気な顔が見られます。「お店も減って、お年寄りが住むには不便な街になってきたのは気になりますね」と語る齋賀さん、轟公民館で好きな将棋を指したり、習字や英会話にも励み、クラシック音楽を聴いたりとの日々を過ごしています。「松波のみなさんには本当にお世話になりました」と語り、この街への愛着が人一倍強い齋賀さんの motto は、「一杯飲んでぐっすり寝るのが一番」だとか……。



“楽しむ将棋”を指すひと時(右)